

森のふくろうへの独言

柳田国男「女の咲顔」えがおから

小田 富英

届くかわが無音の独言 訊けるか翁の再生の詩うた

今朝も

お笑い番組ではないのに人の発言を鎖す高笑い
と本音を引き出すマイクに向かったつくり笑いが
がこの国の心を凍らせる

「エガホは笑うまいとする慎みのひとつ」であったはずなのに

翁は

「政治と戦闘」の季節のなかで「人格の承認と個性の
尊重」を赤子の前の「高盛り飯」に見た両側に小さく
穴をあけエクボができるようにと願った前代の
親たちの身になり心になり
時代の流れに棹さす学びをつくりたかったのだ

「ワラヒは

もともとワラフで割ること」笑いの相手がいれば
「不快と差別を与えていた」との翁の言葉で今を見
ればあの高笑いやつくり笑いにもさみしい合点
と納得がいく

我らは今エミにせずしずとした希望と喝采を送れるか

「笑われてもよい者を

いかに少なくするか」が永い間の人々のこんこん
とした努力であったとあの暗い時代に翁よ
よく言ってくれたものだ

「己れ一身の為にするエガホ」よりも「人に何物かを
与えようとするエガホ」に次の女人のをんなひと「心の余裕と

幸せな集い」を見ていた翁に

今、我らはとうとうと胸張りホホエミ返せるか